

IN THIS ISSUE:

Hot Issue

「アフリカにおける暴力的紛争の予防」プロジェクトの現地調査が始動

紛争が起こるメカニズムを解明し、その予防策を見出そうとする「アフリカにおける暴力的紛争の予防」研究プロジェクト代表者の峯陽一客員研究員と笹岡雄一上席研究員は、研究対象国の南アフリカおよびウガンダとタンザニアでそれぞれ現地調査を行いました。

[READ MORE](#)



人々にぎわうタンザニア、ザンジバル旧市街ストーンタウンの市場

写真: 笹岡雄一

Review

研究者と市民をつなぐイベント

10月2日、日比谷公園で行われた『グローバルフェスタ JAPAN 2010』の中で、JICA研究所は、研究者と市民との交流を図る目的でイベントを開催しました。同イベントでは、JICA研究所に所属する4名の研究者たちがそれぞれの専門領域をテーマに講演を行い、参加した市民の方々からの質問に分かりやすく回答しました。

[READ MORE](#)

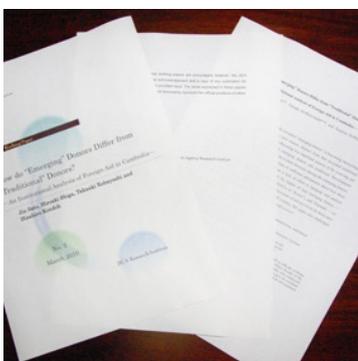


Special

JICA研究所の最新の研究成果を刊行

JICA研究所はこのほど、研究活動の最新の成果を2本のワーキングペーパーとして刊行しました。一つは、4つの新興ドナー国の援助形態と援助動機を比較分析したものです。もう一つは、アフリカにおける社会不安の原因について、民族意識や同一民族集団内での不平等といった点から検証したものです。

[READ MORE](#)



「アフリカにおける暴力的紛争の予防」プロジェクトの現地調査が始動

「アフリカにおける暴力的紛争の予防」研究プロジェクトでは、水平的不平等に着目してアフリカの7カ国で国民の意識調査を行うとともに、そのうち2カ国については単独で時系列的比較を行い、さらに政治制度や社会状況に関して2カ国(4組)を比較研究して紛争が起こるメカニズムを解明し、その予防につなげようとしています。このほど、研究代表者を務める峯陽一客員研究員(同志社大学大学院教授)と、共同研究者の笹岡雄一上席研究員は、それぞれ研究対象国を訪れました。

峯客員研究員は、ジンバブエとの比較研究を行う南アフリカを訪れ、意識調査を実施する調査員たちのトレーニングに立ち会いました。南アでの調査は、同国の社会状況を反映して、黒人、カラード、白人からなる調査チームによって行われます。同研究員は、本調査の内容や結果に高い関心を抱き主体的に取り組もうとする調査員たちの姿を目にし、「この国で、人種に関するデリケートな質問を含む意識調査を行えるようになったこと自体に意味がある。この研究のプロセスそのものが、アフリカでの民主主義の定着を反映していると実感した」と話します。同国ではネルソン・マンデラ氏の釈放から20年が経過し、多様性を尊重する気風が薄れ、多数派政治に移行してきたように見え、本研究から「今回の調査から人種関係の微妙な変化が読み取れるはずだ」と指摘しています。



また笹岡上席研究員は、比較研究するウガンダとタンザニアを訪れ、関係者との意見交換などを行いました。同研究員によると、両国ともこれまでは権力集中型の政治体制を敷き、国内に分離・自治指向の高い地域を抱えている部分で共通性があり、そうした2国の社会状況の変化を比較することに意味があるといいます。ウガンダでは、かつて高度な自治権を有していた中南部のブガンダという政治的に大きな影響力を持つ地域があり、北部や最近政治的に台頭してきた西部地域との間に軋轢を抱えています。これに対し、今月末に大統領選挙を控えているタンザニアでは、元々独立国だったザンジバル地域(島地域)を拠点とする最大野党 市民統一戦線(CUF)と本土およびザンジバルの与党 革命党(CCM)との間に相当な緊張関係がありますが、今年7月の住民投票を受けて新憲法が承認され、選挙後には両党による連立政府が樹立されることが決まっており、同研究員は「ウガンダに比べタンザニアは、全体的に安定方向に向かっている印象がある」と話します。両国での意識調査は間もなく開始される予定です。

アフリカにおける集団間相互の感情について、短期間に同時並行でこのような規模の意識調査が行われることはあまり例がなく、峯研究員は「本調査の結果は、民主主義や平和に関するアフリカの人たちの今の思いを浮き彫りにするものだ。オリジナルな一次資料を使って研究を進められることの意義は大きい」と述べています。現在、各国で調査が進行しており、今後は調査結果の詳細な分析を進める予定です。

研究者と市民をつなぐイベント

JICA研究所は、10月2日、3日に都内の日比谷公園で開催された『グローバルフェスタJAPAN2010』の初日に独自イベントを初めて主催。4名の研究者が今回の同フェスタのテーマであるMDGsについて、また日ごろの研究活動に関して解説するとともに、来場者からの質問に答えるなどして、市民の方々と交流を図りました。



この中で、かつてボスニア・ヘルツェゴビナなどの平和構築に携わった片柳真理研究員と

室谷龍太郎リサーチ・アソシエイト(RA)は、暴力的紛争がいかに人々の心に影を落とし、開発の妨げともなるかについて説明。片柳研究員は、自身の経験から「紛争予防に貢献できる開発援助とは何かについて、常に頭に置きながら仕事をしている」と話しました。

また、コンゴ民主共和国出身のマスワナ ジャン クロード・ジョ・ラマナ研究員は、開発経済の専門家の見地から貧困問題解決の重要性を訴えるとともに、アフリカにおいて依然として乳幼児死亡率が高いことなどを挙げながら、MDGs達成の意義について説明。このほか、吉田耕平RAは、東南アジアのイスラムの置かれた状況を解説しながら、フィリピンなど4カ国で行ったアイデンティティーなどに関する国民の意識調査の結果の一部を披露しました。

その後の質疑応答において、国際協力を学んでいる大学生からの「どうして紛争は起こるのか。紛争解決のために一番必要なものは」という問いに対して、片柳研究員は、民族性の違いを強調するプロパガンダの危険性について述べ、室谷RAは、違う意見を持った人たちが暴力的紛争によらない解決策を見出すための政治制度構築の重要性について語りました。また、マスワナ研究員は、経済的格差の解消が平和への近道だと強調しました。

今回のイベントは、開発援助における研究の役割を広く一般の方々に理解してもらう貴重な機会になったとともに、個々の研究者が研究を行うことの意味についても一度考え、原点に立ち返ることの重要性を再認識した意味でも、有意義な催しとなりました。

Special

JICA研究所の最新の研究成果を発表

JICA研究所はこのほど、最新の研究活動の成果を2本のワーキングペーパーとして刊行しました。その一つは、佐藤仁 元JICA研究所客員研究員による**新興ドナーについての比較研究**の集大成となるもので、二つ目は、JICA研究所が進める研究プロジェクトの共同研究者であるジョン・ロンズデイル ケンブリッジ大学教授によるもので、**民族多様性と経済的不安定**について分野横断的に研究したものです。

新興ドナーに関する論文の中で、佐藤氏と共同著者の志賀裕朗JICA研究所シニア・リサーチ・オフィサーは、アジアの4つの新興ドナー国が行っている援助パターンの比較から、それらの差異および地域安定性、歴史的イデオロギー、そして国際機関からの圧力などの要因について検討しています。

一方、ロンズデイル教授は、アフリカにおける民族意識と市場取引との関係について、社会経済的・歴史的分析を行っています。ケニアの2つの民族グループを対象とした事例研究で、社会不安や政治的圧力の根源となりうる民族グループ内に存在する貧富の格差などの垂直的不平等について検討しています。

JICA研究所ワーキングペーパー